

企業編



型研精工株式会社
大分工場

神奈川県で電子部品や家電を製造するための金型を製造している型研精工株式会社。1980年代に入り日本で半導体の生産が盛んになり始め、この分野にも進出することになりました。当時、九州がシリコンアイランドと呼ばれ、半導体生産が盛んに行われていたことや、初代社長の濱田一男さんが国東町出身で工場用地をお世話してくる人がいたこと、また、大分空港が近くにあることもあり、武蔵町に大分工場を開設することになりました。

開設当時、工場の建築面積は約1,000㎡でした



▲金型の性能テスト

が、型研精工の開発した半導体組立装置が多く、半導体生産メーカーの支持を得て順調に事業が拡大していききました。その結果、6回の増改築で約7,113㎡にまで拡張しました。しかし、1990年代になって日本の半導体生産の国際競争力が弱まり、国内メーカーが減少しました。そこで、大分工場では半導体組立装置の製造に加えて自動車部品の金型を製造することになりました。その後、1993年に神奈川県自動車部品メーカーと合弁会社ケーアンドケーを武蔵町に設立し、自動車メーカーから受注した部品の金型は、すべて大分工場とケーアンドケーで製造するようになりました。



▲金型の設計

現在の型研精工は、電子部品や家電、自動車部品などの精密金型業界ではトップクラスの企業に成長しました。しかし、今後は、自分たちの金型にもっと長く付加価値を付けたいと考えています。依頼のあった金型を製造するだけでなく、企業が製造したい部品自体を自社で製造することを計画しています。そのことで、工場内に製造ラインと部品生産に携わる従業員が必要となり、事業の拡大と雇用の確保につなげていきたいと考えています。



▲金型の組立場

認定
農業者編



株式会社 安部

国東町大恩寺 設立 平成21年10月 従業員 5名

株式会社安部と有限会社安部組の皆さん

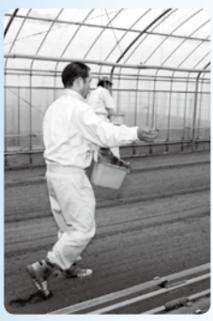
株式会社安部は、国東町大恩寺に2代続く建設会社の有限会社安部組が母体です。公共工事が減る中で、従業員の雇用の確保をするために農業生産法人として設立しました。設立前から農協の紹介で契約農家が栽培した水稲の苗の運搬やシイタケ栽培用の原木の販売など農業に関する仕事をしていました。そして、県が力を入れていっているこねぎ栽培に着目し、本格的に参入することを決め、平成22年にこねぎ用のビニールハウスを15棟建設しました。従業員はこねぎ栽培の未経験者ばかりでしたが、土壌改良に取り組みなが



ら、年に何回も栽培できるこねぎの特性を活かして、栽培方法を確立していきましました。その結果、こねぎ栽培の高単収が認められ、平成24年度園芸関係表彰の新入部門最優秀賞を受賞しました。その後もビニールハウスを10棟増築して、規模を拡大していききました。そして、大分味一ねぎ部会の中でもトップクラスの生産量を誇るようになり、平成26年度大分県農業賞の企業的農業経営部門法人の部で優秀賞を受賞するまでになりました。また、こねぎ以外では、シイタケや米、にんにくの栽培をしていますが、今年からはキウイとカボスの栽培も始め、多角的な農業経営にも取り組んでいます。



今後は、現在国東市が国東町安国寺の常緑果樹跡地に建設を計画している農業団地に参入し、こねぎ栽培面積を現在の1.3ヘクタールから2ヘクタールに拡大し、大分味一ねぎの生産量で県内トップになることです。また、米やシイタケでは、平成26年10月に取得した、農林水産省が推奨する農業生産工程管理手法のJGAP（日本の良い農業のやり方）の認証に恥じないように生産量だけでなく食の安全についても取り組んでいます。



▲今年から始めたキウイとカボス畑

林業・
水産業編



田吹勝幸さん
寿津美さん、寿人さん

国東町富来 3年前から本格的にシイタケ栽培に取り組む

大豆を栽培する兼業農家をしていました。6年前に会社を辞めて専業農家になり、水田の面積を3ヘクタールから、8ヘクタールまでに徐々に増やしていきました。さらに、近所の安田信幸さんに勧められてシイタケ栽培にも挑戦するようになりました。そのような父の姿を見て、子どもの頃からよく農作業の手伝いをしてきた息子の寿人さんは、農業に従事することを決意し、高校に進学する際に農業が学べる国東高校の園芸ビジネス科を選びま



した。さらに、もっと農業のことを学ぶために、県立農業大学校に進学しました。学校が休みになると寿人さんは、勝幸さんの農作業を手伝いました。作業の合間には今後のことを話し合い、シイタケ栽培にも力を入れていくことを決め、毎年7万コマのコマ打ちをしました。そして、今年3月に寿人さんが農業大学校を卒業し、4月からは一緒に田んぼに出て汗を流しています。さらに、今年の10月に介護施設を退職した妻の寿津美さんも加わり、家族3人で農作業を行っています。



寿人さんは、「今は、田植機や、コンバイン、トラクターと機械の操作を覚えるだけで精いっぱいです。でも、高校や農業大学校で学んだ農業の知識を活かして、父に負けないりっぱな農家になりたい」。寿津美さんは、「私は、今まで農作業を手伝えなかったのが大きかったです。でも、3人一緒に過ごす時間が増えてうれしい」。勝幸さんは、「息子と一緒に農業ができるのはとてもうれしいが、まだまだ足りない部分もある。でも、どこかしら、息子が一緒に農業をしてくれるから、本気で農業に取り組めるし、息子のために農業が続けられる環境をしっかりと作ってやりたい」と語っていました。

